



地 動 儀

廣井脩先生を悼む

日本災害情報学会
会長 阿部勝征

前会長の廣井脩先生は去る2006年4月15日にご逝去されました。享年59才でした。

先生は災害情報学を絶えず深化させてこられたとともに、そのさらなる発展を願って1999年に日本災害情報学会を立ち上げられ、研究者や行政、マスコミ、ライフラインなど各界各層の積極的な参加を促されました。その初代会長を6年間務められ、発足当初300名足らずであった会員数が500名以上に達するほどに学会を成長させました。理事会では「廣井賞」創設の検討を進めております。

研究・教育の活動を続けておられたばかりでなく、多数の政府委員会の委員長や委員を務められる一方で、数々の防災シンポジウムなどに参加され、学識経験者として災害軽減の推進に大きな貢献を果たされてきました。その功績から2004年に防災功労者防災担当大臣表彰を受賞されました。

卓越した業績に加え、これからさらに大きな成果を生み出される矢先のご逝去で、志半ばにして運が落ちたことは、学会のみならず社会にとりまして計り知れない損失であります。

ここに先生の生前のご功績とお人柄を偲び、謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

(東京大学地震研究所教授)

目 次

- ▶ 追悼 廣井脩先生(前日本災害情報学会会長) (2-3, 追悼ページ)
- ▶ 第14回理事会報告 (2)
- ▶ 公開フォーラム デジタルで変わる災害情報 (3)
- ▶ メディアセッション企画 (3)

嗚呼、廣井先生が死んだ。

偲ぶ会を9月9日、東京大学大学院情報学環と共催で



日本災害情報学会の創設に中心的な役割を果たした、前日本災害情報学会会長の廣井脩東京大学大学院教授が4月15日、亡くなりました。直腸がんの手術から約2年半、大学の研究・教育活動だけでなく、国の緊急地震速報委員会座長など公的な仕事も精力的にこなしながら、癌と闘ってききましたが力尽きました。59歳の若さでした。

「余人をもって代えがたい」の言葉がありますが、廣井先生には文字通りこの言葉があてはまり、その死は本学会のみならず、日本の防災にとってかけがえのない人を失いました。大変悔しく

無念です。

廣井先生が災害情報の研究を始めたおよそ30年前は「楽道を行くような」(廣井先生)もので、ある土木研究者に「災害情報の研究が何の役に立つのか」と聞かれ、返答に窮したということです。しかし、時代は災害情報なくして防災・減災は語れない時代になりました。この道を、本学会を阿部会長のもとでさらに発展させていくことが、亡き先生の遺志に応えることだと思います。

団塊の世代らしくニューミュージックも好きで、先生の気晴らしにと研究室に持ち込んだ大塚博堂の「ダスティン・ホフマンになれなかったよ」をじっと聴いていた姿が忘れられません。

廣井先生を偲ぶ会を、東京大学大学院情報学環と共同で9月9日(土)夕方から、東京・市ヶ谷のアルカディア市ヶ谷(私学会館)で開催します。詳細は拙文書やホームページでご案内します。(事務局 中村)

日本災害情報学会 第8回学会大会

10月28日-29日 東洋大学で開催

日本災害情報学会は第8回学会大会(研究発表会、総会など)を2006年10月28日(土)、29日(日)の2日間の日程で、東京・文京区白山の東洋大学で開催します。会員多数の参加と研究(事例)発表の申込を期待しています。

■大会参加申込と研究発表募集

1. 期日: 2006年10月28日(土)、29日(日)
2. 会場: 東洋大学6号館(東京・文京区白山5-28-20 電話03-3945-7224)
3. 日程: 10月28日(土) 午前: 研究発表 午後: 研究発表、懇親会
10月29日(日) 午前: 研究発表 午後: 総会、メディアセッション
※メディアセッションの開催趣旨は3ページをご覧ください。
4. 締め切り: (1) 大会参加申込 : 8月25日(金)
(2) 研究発表テーマ申込 : 8月25日(金)
(3) 研究発表原稿の提出 : 9月22日(金)
※本ニュースレターに差込の用紙で申込みください。
5. 発表原稿形式: A4版、1段組、横書き、本文10.5ポ、6枚以内で偶数枚。
※詳しくは学会ホームページで、フォーマットをご確認ください。
6. 提出方法: CD-R。印字した原稿を添付する。
7. テーマ申込、原稿提出先: 日本災害情報学会事務局
・〒160-0011 東京都新宿区若葉1-22 ローヤル若葉208
・メール tokio@jasdis.gr.jp
・電話 03-3359-7827 ・FAX 03-3359-7987
8. 参加費: 会員1000円、非会員3000円(当日会場にて)
9. 総会: 10月29日(日)13:00(予定)
10. 懇親会: 10月28日(土)18:00~20:00 東洋大学2号館16階スカイホール
参加費5000円(予定、当日会場にて)

大会参加者は各自で宿泊の手配をしてください

第14回理事会報告

故廣井脩前会長の多大な功績を称え、日本災害情報学会廣井賞の創設が決まった。

日時：2006年5月11日(木)

場所：東京大学大学院情報学環

出席：阿部、宇井、伊藤、池谷、五味、川端、高橋、吉井、渡辺の各理事、伯野・谷原監事、(オブザーバー)田中企画委員長

1. 会則、運営規程の改正を承認

①購読会員(会則第11条3)の値上年額4,000円⇒10,000円

②第23条に条文を追加

4. 理事会の議長は会長が務める。

③運営規程(除名の手続き)の変更
除名の会費滞納期間を3年から2年に改める。

2. 第8回学会大会実行委員会の体制の承認

大会実行委員長：田中淳

大会実行委員：中村功、三上俊治、白石真澄、安養寺信夫、竹内正信、廣野澄、岡谷直也、松尾一郎

メディアセッション部会：(部会長) 藤吉洋一郎、(企画運営) 山崎登、谷原和憲、村木正嗣、市澤成介、布村明彦、横田崇、赤石一英、天野篤

3. 2005年度決算報告、2006年度予算案の承認

4. 来年の第9回大会開催地決定

2007年11月16日-17日に長崎県島原市で開催する。大会実行委員長は高橋和雄理事。

5. 故廣井先生を偲ぶ会を開催する

東京大学大学院情報学環と共同し、2006年9月9日(土)に開催する。開催内容は藤吉副会長を実行委員長とする3委員会が協同して検討する。

※9日(土)午後6時半から、アルカディア市ヶ谷(東京・市ヶ谷)で開催。

6. 日本災害情報学会廣井賞の創設

廣井脩前会長の功績を称え、日本災害情報学会廣井賞を創設する。具体的な内容は藤吉実行委員長の「偲ぶ会」実行委員会が決める。

7. 廣井家からの学会への寄付の申し出を、謹んでお受けする。

学会誌「災害情報」5号

論文募集中

締切：06年9月29日(金)
詳細は学会ホームページを参照

追悼 廣井脩先生(前日本災害情報学会会長)

人の見える防災行政に導いた廣井脩先生

国土交通省 河川局 河川計画課長 布村 明彦

私が、廣井脩先生と初めてお会いしたのは、1986年頃でした。1982年に約300名の命を奪った長崎水害についての先生の研究は、水害対策を進める上で、住民に的確な情報が伝達・共有され、どのように人々が行動するかがとても重要であることを気づかせるものでした。河川局のみんなで先生の話を伺い、その後も、水害や土砂災害対策についてのいろいろなご指導をいただくこととなりました。

2001年の中央省庁再編で内閣府に防災担当部署が設けられ、私は参事官(地震・火山対策担当)になりましたが、中央防災会議で東海地震、東南海・南海地震等の地震対策、富士山ハザードマップ、防災情報の共有化などの検討を進める中で、ほとんどすべての場面で先生にご参加いただきました。これらの対策の検討で私どもが目指したのは、形式的な防災から、社会も行政も現実的対応ができる防災への転換でした。中央防災会議の専門調査会には、いろいろな専門分野の先生方がおられますが、実際の人・社会への繋がりについてご指導いただく役割は、その多くを廣井先生に担っていただきました。振り返ってみると、そういう意味でここ最近の防災行政は、中心的に先生に引っ張っていただいた気がします。

先生の最後のお仕事となった防災情報用語の見直しの検討会については、その提言を6月22日に国土交通大臣から記者発表いただき、新聞・テレビで報道されましたが、人との繋がりを大切にされた改善内容は、その後も新聞各社の社説やコラムでも度々紹介されています。



大分県研究発表会で
廣井脩先生(2004年)

先生ご自身も人の繋がりを大切にされ、そのおかげで、防災関係者みんなが幅広い人の繋がりをもつことができました。人の繋がりの「要」であった先生が去られた今、最も心配されるのは、様々な関係者の総合力が不可欠な防災対策において、こうした繋がりが薄れないかということです。

先生が大切にされてきたいろいろなものを、しっかり現在・後世に繋げていくようにすることは、残された我々の義務だと思っています。

わかりやすい災害情報を求めて

東洋大学社会学部教授 田中 淳

「じゃ、どうすれば良い?」、「自分でとったデータで言わなきゃだめだよ」、「理論はひとりでもやるもんだよ」。幾つかの言葉が浮かんでくる。廣井先生と初めてお目にかかったのは、昭和52年晩秋のことだと記憶している。学部の「言語心理学」で、担当の岡部慶三先生が風邪で声が出なくなり、当時新聞研究所の助手をされていた廣井先生が1コマ代行された時である。直接の言語刺激ではなく、その意味に反応する媒介過程モデルのお話だった。

その後、「言語行為論」を学ぶ大学院のゼミで一緒した。この言語行為論は、生成文法論や意味論に加えて新たな言語理論として、当時、哲学の分野から自然言語処理の分野にまたがる広い研究領域で関心が持たれていた。現実の人間のコミュニケーションを分析する上で、とくに現実の発話の意味理解を考える上では刺激的な理論だったからである。我々は多くの文を発話する。「ちょっと薄いね」、「天気予報で雨が降るって」などである。これらの文は事実を文字通りの述べていることもあるが、異なる指示機能を果たしていることも多い。「ちょっと薄いね」は「焼酎を足してくれ」という要請でありうるし、「天気予報で雨が降るって」は「傘を持って行きなさい」という指示であることの方が多い。短い文に行動指示と理由とが巧みに込められている。しかし、裏に込められた意図を読みとる難しさゆえに、誤解が生じたり、通じないことも多い。相互の知識共有や状況認識の共有を前提とするからだ。

しかし、災害情報では、少なくとも現段階では十分な知識を全員に期待できない。それだけに災害情報の「わかりやすい表現」は難しい。最後に一緒させて頂いた議論の一つが、「わかりやすい災害情報とは何か」だった。これもひとつの巡り合わせかもしれない。「理論はひとりでもやる」ものだろうが、「みんなで知恵を出し合わない」といけないのだろう。その場が日本災害情報学会だろう。少しでも前に進み続けなければならない。

— 無 題 —

大阪管区気象台 荒谷 博

「廣井様」が
咲いた (2006.3)

廣井先生との初めての出会いは、札幌勤務時代に読んだ一冊の本であった。

残念ながら本のタイトルは思い出せないが、初めて「災害社会学」「災害情報学」という分野と出会い、「防災情報」は発表側、伝達側、受け手側が情報を共有し、その情報の意味を理解してこそ初めて効果的に作用する。」という記述を読んで、大きなショックを受けたのを今でも鮮明に覚えている。

平成2年4月、東京・気象庁に転勤となり先生と知り合い親しくしていただくようになったわけだが、その翌年から雲仙岳噴火、台風第19号、北海道南西沖地震、そして阪神・淡路大震災と様相の異なる大規模な災害が立て続けに全国各地を襲った。雲仙岳噴火以前にも学問としての「災害社会学・情報学」は防災分野において認知されていたものの、その成果を「防災行政」に直接反映させるということはまだまだ多くはなく、気象庁においてもその研究成果を情報の改善に役立てるという機会はなかったように思う。が、雲仙岳噴火災害以降、それまで先生等が研究されてきた「災害社会学・情報学」から見た防災情報の改善の必要性について声が高まった。気象庁でも防災情報の改善のための各種検討会を立ち上げ、先生に直接参画いただき「火山情報の名称変更」、「震度階級の見直し」等々を行ったのを昨日のように覚えている。また、現在「新しい防災情報」として検討が進められている「緊急地震速報」の運用開始に向けた検討会においても、先生はお亡くなりになる直前まで座長としてご尽力いただいた。本当に、先生は「災害社会学・情報学」という学問を確立させた立役者であると痛感する次第である。

一方、今でも思い出すのは、阪神・淡路大震災のあと「これまで研究してきたものがなんの役にも立たなかった。俺は一体これまで何をしてきたんだ。」と自分を責め続けていた先生の姿である。その時の先生のつらく悲しげな顔は今でも思い出す。先生は本当に心優しい「防災人」であった。

個人的には、いつも飲むたびに、あの何ともいえない素敵な笑顔で「弟子とってくれるのは荒谷ちゃんだけだ。荒谷ちゃんは俺の一番弟子だ!」と語っていたのを本当にうれしく思う。

今夜も先生と共通の趣味であった70年代のロックを聞き、先生直伝の「鼻の頭に当たる位のたっぷりの水を入れた焼酎」を飲みながら、あらためてご冥福を祈りたい。合掌。

廣井先生を偲ぶ

JR東日本新幹線運行本部長 万代 典彦

2004年10月23日(土)の夕方、私は東京の自宅で揺れを感じ、すぐテレビをつけて、震源地は新潟で震度6の地震と知りました。「新幹線は当分止まるな。あーあ、折角の休日なのに」と、ため息をつきながら新幹線指令所に出動するための家を出た直後の18時20分過ぎに、指令所から「上越新幹線が脱線した模様!状況は不明、緊急参集せよ!」のメールが携帯電話に着信し愕然としました。正直言って想定外のことでした。「脱線だけでは済まないだろう・・・。私

は何をしなければいけないだろうか?」と混乱した頭の中で自問自答していた時、ふと脳裏を過ぎったのは、「廣井先生の顔」です。先生なら何をしろと言うだろうか?

乗客の安否確認、救出は当然ですが、並行してパニック防止、情報提供...等、災害時に必要な「社会情報」とは「必死に思い出して行くうちに、指令所に到着したときは、結構度胸が据わってきた覚えがあります。」

廣井先生には2000年から御指導いただきましたが、まだ災害等の異常事態での社会情報、企業の役割やそれに対する備え等を余り意識していなかった私にとって非常に新鮮でしたし、先生の話を引き出すさくばらんな話術や懐の深さには大変敬服しました。トラブルの多い当社ですから、先生に「あの時のJRの対応は、全然駄目だよ」とよく叱られました(飲み屋の方が多かったですが)。言訳をしているうちに「本当はどうだったの?」と例の口調で聞かれ、つい社外秘?の裏話も白状させられることも度々ありました。今まで、大規模災害などにおいても自分の企業中心に発想していたものですが、社会的存在として何をなすべきかの視点も具体的に意識しはじめ、勉強会の中でヒントを得、弊社の異常時対応指針等にも反映させたものも多く有り本当に感謝しています。4月から5月にかけて当社の首都圏輸送で連続トラブルが発生し、駅や車内での大混乱を惹き起こしてしまいました。廣井先生の御冥福を祈りながら「お叱りを受けないように」と反省する日々です。

「弱い者」への眼差し

毎日放送ラジオ局報道部記者

(「ネットワーク1」17プロデューサー)

大牟田 智佐子

結局、廣井先生の肉声は私の手元に残っていない。収録すれば最後になると恐れたからだ。それ以上に「先生はきっとまた元気になる」と無理矢理思い込もうとしていた節がある。

2005年5月。少し痩せた先生は京都の和菓子をお下げた私に「土産持ってこない奴は研究室に入れないんだ」といつもの軽口を叩き、そのくせご自分はい一口も召し上がりず秘書さんと私が食べるのを嬉しそうに見ていた。そして言った。「防災を研究して30年、自然災害の被害がどれほど減ったのだろうか。非常に虚しい。」私は菓子を喉に詰まらせそうになった。返す言葉がなかった。「被害の軽減」を数字で見たかったと先生は話した。研究室を出るとき「先生、写真撮りましょう」と声をかけると「おいおい遺影かよ、勸告してくれよー」と笑って応じてくれた。「また来ます」と挨拶したがそれが最後だった。

阪神大震災当時、孤独感を抱えながらテレビで取材していた私に廣井先生の「災害情報研究会」は救いだった。関西には相談相手がなかった。先生に頂いたヒントが社の体制に反映した。震度情報を初動にどう生かすか。安否情報やハザードマップの重要性...。しかし本当に教えて頂いたのは「弱い者」への眼差しだ。ラジオに異動した私に、被災者の生活再建や要援護者対策に注がれたあの精力そのままに「ラジオこそ弱者を救う力がある」と励ましてくれた。その声を聴くことはできない。録音しなかったことが悔やまれてならない。

阪神大震災の被害が確定したのは11年たった今年。廣井先生の見つかった「被害の軽減」も、数字で表すことができる日が来るかもしれない。その数字は、直接教えを受けた私たちがこれから増やしていくべきものだ。そう信じている。

返事は朝一番までに

静岡県防災局 岩田 孝仁

注意情報はそんなに理解されていないのか、何で避難地では車を使わせないの、緊急輸送路の指定はどうやっているの、激甚災の適用はそんなに助かるの、県と市の財政負担は?など、何か疑問が湧くと、それで静岡はどうしているの、どう考えているの、「げんきー・・・」と云いながら例の調子で気軽に電話がかかってくる。時々お返しに質問をぶつけると、それはこうだよ、それは違うよと、熱心にご教授いただいた。

2000年11月の住宅再建委員会の議論では、自助・共助・公助の枠組みとそのバランスの確保、そして共済制度創設の必要性についての先生の強い思いが、「明日までに意見をくれ」と深夜1時を回って寄せられるメールにひしひしと伝わってくる。それならと、返事は何とか朝一番までにこぎつけようと、こちらも必死になってしまう。

1995年の阪神・淡路大震災を起点に、防災研究者は皆、駆け足状態であった。今年年頭のとある委員会でお会いした時交わした会話に、「中国の3大怪奇物語の『封神演義』って読んだことある?時代をワープしロケットが空間を自由に飛び交う、人造人間が登場するわ、まるで未来小説だよ。魂が吸い取られるように一気に読んでしまった。」との言葉、太公望の目で何を示唆されていたのか。

東海地震が抱える社会的課題の大きさから、災害情報の研究に深く足を踏み入れることになったとおっしゃっていた先生である。ちょっとでもサボろうものなら、例の調子で、静岡の地震対策は大丈夫?あの制度はどうなっているの、何が課題なのかちゃんと検討してみよ!と、今でも突然叱咤の声が飛んできそうである。きちんと答えていくことが我々の使命であろう。

廣井先生の思い出

(社)日本損害保険協会 近畿支部
斉藤 健一郎



米国サンノゼのベトナム料理店で(2000年)

「こんにちは。損保の斉藤です」東大社会情報研究所の廣井先生の研究室をはじめにお尋ねしたのは、1995年の秋口であったと思います。その頃先生には、すでに何度かお会いしておりましたが、私一人で面談にお伺いしたのはこの時がはじめて。廣井先生は、随分とはにかみながら、色々な話をしていただいたこと、まるで昨日のこのように思い出されます。あれから11年、私にとっての廣井先生は、「防災を志す人々にウェルカムの門戸を開いて下さった先生」「被災者に対する熱い使命感を持って取り組んだ先生」そして「初対面にすこぶる弱い先生」でありました。そして、はにかみ屋の廣井先生の周りには、いつも、沢山の方々が取り囲み、熱い防災談義を交わしていました。損保についても廣井先生は、「斉藤ちゃん、住宅再建共済制度と地震保険は2階建て構造するとか、住民が更に加入しやすい保険の形はどうだろうか。」「火災保険契約更改時に火災警報器を損保から無料で提供して、火災警報器を中古住宅にも普及することはできないだろうか。高齢者の火災による逃げ遅れを減少できるのではないか。」などなど、被災者の目線に立った問いかけを、お会いするたびにいくつも質問されました。熱い談義のお聞きには、「またやりましょう。ありがとね。どうもどうも。」と、片手を

あげてご家族のもとへ帰宅なさる。今、「私の方こそありがとうございました」と言いたい。

以前に、サンノゼへ向かう飛行機の中で、私は廣井先生に「先生、なぜビジネスクラスの席に座らないのですか?」とお聞きしたことがありました。廣井先生は「僕が前にサンノゼ大学で教えていたときにさ、かあちゃん(奥さま)は日本からいつもエコノミーで来てくれたんだ。ビジネスで良いっていうのにさ。それを思うとさ、僕だけビジネスクラスに座るのはできないんだよね、いくら仕事だといってもさ。」とおっしゃる。はにかみながらお答えになった廣井先生の、ひそかなご家族への思いやり。暖かくそして優しくひそかに、のぞかせてくださいました。

災害情報、被災者支援をテーマに駆け抜けた廣井先生の軌の上に、今、防災談義を交わした沢山の方々が立ち、廣井先生の志を秘めながら立っていらっしゃる。廣井先生の災害・被災者に対する思い、そして、私たちにいただいた思いやりは、今も私の心にも深く刻まれております。「廣井先生、先生にお会いできてほんとによかった。先生ありがとうございました。」ご冥福を心よりお祈りしております。

廣井さんにエンパワーされた私(たち)

時事通信社「防災リスクマネジメントWeb」編集長
中川 和之

2度目の気象庁担当となった1993年、科学記者として企画取材をする中で災害情報研究会を知った。放送メディアだけの場に「通信社もリアルタイムメディア」と訴え、廣井さんや10年前から面識があった川端さんの後押しもあって参加した。記者として13年目の胎の乗り始めたころだ。人脈を作って深く学びたい時期でもあり、毎回、ゲストスピーカーを質問攻めにしていた。

昨年11月から、廣井さんが座長を務めた消防庁の国民保護関係の検討会に声をかけていただき、NTT東日本の東方さんと席を並べて議論に加わった。会議の終了後、たまたま年輪の話になった。「ちょうど50になりました」と言ったら、「まだ若いなあ。中川ちゃんは、昔から生意気だったから…(もっと歳を取っているかと思った)」と笑っておられた。記者が生意気を言える場である災情研を作ったのは廣井さんである。そこで、記者たちに生意気を言わせたのは、先生の戦略だったのではなからうかと、今ごろ、気づいた。

私たちマスコミ関係者は、客観報道を理由とし、自らを安全な場所に置いて、いちゃもんだけ付けがちだ。しかし、オフレコで勉強をする場の災情研では、ライフライン企業や行政の方に一方的に質問をして話を聞くだけでなく、マスコミ側も事情を説明して相互理解を図ることが求められた。

相手から本音で事情を聴くと、簡単に無視は出来ない。自分たちの事情だけを一方的に押しつけられなくなる。双方の事情を知っている廣井さんが、うまくマスコミ側の発言を引き出して我々に生意気を言わせ、企業や行政、地震学者たちと本音のやりとりが出来るようにし向けていた。

そうやって廣井さんにエンパワーされた私たちマスコミ関係者が、当事者の一翼を担ってできたのが災害情報学会であり、今後も役割を果たさねばならないのは当然だ。それだけでなく、さまざまな人と接触できる立場を活かし、減災の輪の中に多くの人たちを当事者として巻き込む働きをしていくことが私たちの務めなのだろう。

公開フォーラム

デジタルで変わる災害情報

～地デジワンセグ
情報共有プラットフォーム～

日本災害情報学会「デジタル放送研究会」は、2年間の研究成果をもとに、公開フォーラムを開催します。行政・メディア・ライフライン関係者をはじめ、多くの方の参加を期待しています。

日時：2006年7月29日(土)12:30～
会場：東京大学 山上会館
費用：参加無料、懇親会4,000円

申込：名前・所属・電話番号・懇親会参加予定を書いて、メール(tokio@jasdis.gr.jp)またはFAX(03-3359-7987)で、学会事務局へ。

プログラム

開会挨拶 … 13:00～13:10
藤吉洋一郎 (大妻女子大学 NHK)
研究事例紹介 … 13:10～14:35
天野教義 (TBSテレビ)
小田貞夫 (十文字学園女子大学)
田島 誠 (東海テレビ)
大石 剛 (静岡放送)
招待講演 … 14:35～15:15
「知事の見た中越地震の行政対応」
泉田裕彦 (新潟県知事)
ディスカッション … 15:30～17:00
コーディネータ：藤吉洋一郎
パネリスト：泉田裕彦、岩田孝仁 (静岡県防災局)、羽原順司 (NHK新潟放送局)、首藤由紀 (社会安全研究所)、中村 功 (東洋大学)
提言・開会挨拶 … 17:00～17:10
藤吉洋一郎 (学会副会長)
懇親会 … 17:30～19:30

第8回日本災害情報学会大会

「メディアセッション」企画

今秋の学会大会で初めて「メディアセッション」を試みます。

これまでの学会発表は、どちらかというと研究者向けで、学会に入室している放送局やライフライン、行政などにとっては発表しにくいといった声が寄せられていました。そこで、テレビやラジオのニュースや企画、レポート、それにライフライン各社や自治体などの広報啓発、研究ビデオなど、映像・音声作品も災害情報の成果として発表できるようにしました。

今回は、実行委員会から8編ほどお願いする予定です。お楽しみに。

廣井先生を偲ぶー住民の元気のための171ー

NTT東日本災害対策室担当部長 東方 幸雄

災害用伝言ダイヤル(171)といえば廣井先生を思う人は多い。阪神・淡路大震災時の被災住民アンケートで多くの方が「家族・友人の安否が知りたい」との要望に応えるため、NTTが廣井先生を中心に検討し開発・導入したものだ。

昨年、切迫している首都直下地震の被害想定が公表され、二次災害の防止と事業継続により間接被害額を減少させるため、発災直後は社員や職員を会社等に留めたいとされている。その際、家族の安否を会社にいるお父さん等に伝えることが必須で、家族の無事情報がないと何としても確認のため帰宅し、しばらく出勤しないというのは人間心理だろう。

新潟県中越地震の際の171の利用状況を分析してみると、被災地内からの無事を伝える安否情報の発信率が2～3%であることが分かった。

昨年夏、入院されていた先生をお見舞いに行った際、171の認知度と被災地内からの無事情報の発信の啓発についてお話した。その際、先生から「被災地外の方が無事を心配するのが一般的な行動。被災地内からの無事情報の発信は、通常時の人間行動と逆のことを啓発することとなるので難しい!」とおっしゃっていた。

家庭内で考えると遊び回って帰ってこない子供達を親が心配するのと同様なのだと思う。「無事情報を家族や友人が聞き合う」という171の本来の使われ方がされないと安否確認システムとしての機能が果たせず、結果的に事業継続できないことになり、間接被害額の拡大にもつながりかねない。



廣井先生、行きつけの店
「本郷・佐とう」

先生とは、いくつかの国の委員会でご一緒させていただき、常に被災住民の立場でコメントされ会議をまとめておられた。入院中ベッドの上で、「研究者としてこれからも国民に伝え貢献しなければ!」とおっしゃっていた。そんな先生のお人柄と使命感に魅かれ、また先生の遺志の実現に向け、「あなたの無事を伝えましょう!」を合言葉に「被災地からの無事情報の発信!」について今後も啓発したいと思う。

「被災地の味方」という生き方

日本テレビ報道局社会担当部長 谷原 和憲

廣井先生と最初にお会いしたのは、92年に始まった「災害情報研究会」、いまの学会の前身のような勉強会でした。先生からの最初の一言「あっ、このお兄さんだ! だめだよ、危ないことしたら」その前の年に起きた雲仙普賢岳災害。6月3日の大火砕流が起きる数日前、自分は火砕流の「先端」部分で堆積物に手を突っ込み、「ものすごく熱いんです」と記者レポートをしていました。先生は、その放送を見ていたのです。廣井先生から最初に教わったのは「被災地の人たちは、マスコミの動きを見て判断材料にすることがある」でした。

その後は災害取材現場に行くたびに、先生に電話で被災地の状況を報告しては、「この災害の問題点は何か?」いつもアドバイスをもらっていました。そのなかで、廣井先生の「被災地のために働く」という姿勢を眼の前で勉強させて頂いたのは、2000年・有珠山噴火でした。

3月末に始まった噴火が1週間ほど経つと、気象庁などの現地対策本部では「被災地の人たちに火山活動の盛衰を正しく理解してもらうには、どういう言葉で伝えるのが良いか」が課題でした。この現地本部で取材中、ある気象庁幹部から「廣井先生に現地に来てもらえないか、連絡を取って欲しい」と頼まれました。実はこの時、先生はお嬢さんの大学進学に伴う引越に付き添い仙台にいました。それでも電話で「有珠の事情」を伝えると、仙台での予定を切り上げて被災地にかけつけ、噴火予知速報が発する情報の「言葉使い」を支えていました。その時の先生のひとこと「気象庁の幹部から“国の一大事ですよ”って言われたら、娘の所にばかりいるわけにはいかないだろう。谷ちゃん」

廣井先生は、いつも「被災地の味方」でした。そして、被災地を仕事場にする報道関係者からも「味方の仲間」をふやしたくて、取材や相談に応じてくれたのだと思います。先生の気持ちをこれからも胸に秘め、微力ながらも「仲間作り」を続けます。

学会プラザ

【短信】

▼緊急地震速報の先行的提供開始

気象庁は5月22日の「緊急地震速報の本運用開始に係る検討会」中間報告を受けて、8月1日から緊急地震速報の先行的な提供を開始する。提供先は、鉄道やエレベータなどの設備の制御、工事現場等の作業員の安全確保などで、現時点で提供しても混乱を生じないと考えられる分野である。放送、駅や百貨店、学校、携帯電話などへの提供は来年以降となる。

それまでに、緊急地震速報の正しい理解が広まることを期待したい。地震を検知して5～6秒程度で決めるので誤差は大きい、上手に使えるならば私たちの安全に大きく寄与する。報道では、誤報や大きな誤差ばかりを取りあげないで、うまく活用しようとしている例を多く紹介してほしい。

【書籍紹介】

◇日本大学文理学部地球システム科学教室編「富士山の謎をさぐる」(築地書館、2006.4、2,520円)

富士山についての最新の研究成果に基づき、富士山の成り立ちから、300年前の宝永噴火や青木ヶ原を作った噴火、2900年前の御殿場岩屑なだれなどの噴火史を時に専門用語を交えながら解説する。切り口が、なぜ日本一高いのか、富士山はなぜそこにあるかなど、興味を引きやすく、専門用語をとばして読んでも、充分楽しめる内容だ。

火山の恵みという温泉がすぐに頭に浮かぶが、ここでは富士山の恵みとして火山灰土壌を取り上げている。降り積もった火山灰による「黒ボク土」は、かつては不毛の土地と考えられていたが、リン酸肥料が使われることで、保水性がありながら水はけも

良いとして肥沃な土地となり、根菜を中心とした農業に適した土壤になることも紹介している。

◇木股文昭、林能成、木村玲玖「三河地震60年目の真実」(中日新聞社、2005.11、1,365円)

戦争によって消されようとしていた三河地震の震災を掘り起こし、最新の地震学と防災研究の知見をもとに分析し、将来の地震災害対策に役立たせようとした力作である。

学術的にしっかりとしているだけでなく一般の方にもわかりやすく書かれている。戦時中で十分な記録がない分は、被災者の体験をもとに書かれた2名の画家による絵が補って余りある。

本書の説く「防災の目的は「いのちを守る」ことと「くらしを守る」こと」については、すべての人の共通認識となってほしい。

本書は、三河地域の書店で週刊ベストテンに入ったそうだが、全国の方にお勧めしたい。少なくとも災害情報学会会員に必読の書といいたいだろう。

◇阪神・淡路大震災記念人と防災未来センター企画編集「減災」Vol.1(山海堂、2006.4、2,800円)

「実践的な減災研究の学術的な価値を称揚し、同時に実務家のニーズにも応えることができるよう」新たなタイプの学術誌として創刊された。

創刊号では、人と防災未来センターの専任研究員(OB含む)6人により初動情報、災害医療、住宅復興などの観点から阪神・淡路大震災がレビューされている。各論文には数多くの参考文献が示され、11年前の震災の巨大さと根深さを改めて実感させられる。

事務局だより

■学会HPがリニューアル

日本災害情報学会のホームページをリニューアルしました。

- トップページを作るに当たって、
1. 学会らしいもの(商売ではないので、チャラチャラしない)
 2. シンプルで見やすく分かりやすいもの
 3. これまでの学会HPの雰囲気や踏襲する

の3点を条件に製作者に依頼しました。コンテンツメニューは学会大会、ニューズレター、学会誌、シンポジウムなど学会活動に沿ったものにしました。これによって、希望するコンテンツが簡単に見ることができ、たとえば学会誌に投稿したい人が、投稿規定や原稿作成例を容易にみつけられるようになりました。

可能な限り、これまでの学会活動記録も載せましたので、皆さんの災害調査・研究に役立ててください。

■入退会者(2006年4月1日～7月7日・敬称略)

【入会者】

正会員: 扇 一平(文化放送)、朴 元浩(パシフィックコンサルタンツ)、村上正浩(工学院大学)、鹿角優邦(NPO法人砂防広報センター)、栗田暢之(NPO法人レスキューストックヤード)、森川喜光(NTTフアシリティーズ)、田辺義博(兵庫県)、平井雪江(東京メトロポリタンテレビジョン)、八木浩一(災害時交通流監視システム研究所)、林 大輔(総務省)、松原彰士(宇宙航空研究開発機構)、山本 栄(東京理科大学)、浅野俊幸(防災科学技術研究所)、小原弘志(国土技術政策総合研究所)、廣井 豊(NTT東日本)、林 能成(名古屋大学大学院)、中川 勲(藤井組)、森田師郎(杉並区)

学生会員: 小澤佑貴(工学院大学)、荒木健太郎(気象庁気象大学校)、廣井 悠(東京大学大学院)

賛助会員: 国土交通省関東地方整備局利根川上流河川事務所、株ハレックス

【退会者】

正会員: 杉山 裕、武藤大海、神賀 誠、竹内 勇 学生会員: 岡本英士

編 集 後 記

今号は廣井前日本災害情報学会会長の追悼号となりました。先生はまさしく本学会の生みの親であり、先生が存在がなければ「災害情報」をキーワードにしてさまざまな立場の方が集う場は生まれなかったと思います。「アメリカ災害情報学会」や「フランス災害情報学会」といったものはありません。災害が多発する日本で独自に生まれた学会です。小さな学会であっても社会への貢献は大きい、みなさんの力を結集しそういう学会を目指したいと思います。

▼廣井先生が詠まれたお歌「流れ添って妻と歩んだ秋風路再び還る日の来ることを」。愛妻家の先生でした。(元広報・大西)▼防災に熱い思いをもたれていた廣井先生、ご冥福をお祈りします。(田和)▼何をすべきか、少しわかってきました。廣井先生のおかげです。感謝!!(天)▼集う多くの人々を照らし、太陽であり李の木のような廣井先生でした。(注)▼「自分の職場を愛せることは大事」の言葉が胸に残っています(都)▼世はメディアスクラムと糾弾ショー花盛り。先生のコメントお聞きしたかった。(渡)▼多くの災害関係者との輪を作ってくれた廣井先生に感謝!(東)▼難病で辛くてもお人々のためを思う姿には感動しました。合掌。(た)▼先生の遺影を見る度に涙張らなくてはいけいさせるが…寂寥感はあるばかり(中信)▼5/13三宅島に廣井様がお嬢様の手で植樹されました。感無量。(干)▼誰の為に…、原点を忘れずにいられたのは廣井先生のお陰です。(秋)▼取り組みは確実に拡がっている。故にさらに“広い”視野が不可欠だ。(中川)▼10年後、20年後、このニューズレターを読んだとき何を思うだろう?(黒)